

**全力
討論!**

がん患者さんと家族を支えるために
「図書館と病院・医療従事者の連携が始まる」

報告書

2013年8月

NPO 法人キャンサーリボンス

全力討論! がん患者さんと家族を支えるために「図書館と病院・医療従事者の連携が始まる」

ワークショップ 概要

- | | |
|-------|---|
| ■開催日時 | 2013年6月9日(日) 11:00~16:00 |
| ■テーマ | 全力討論! がん患者さんと家族を支えるために「図書館と病院・医療従事者の連携が始まる」 ワークショップ (図書館を、健康・医療情報発信の拠点として活用するための討議) |
| ■会場 | パソナグループ本部 会議室 (東京都千代田区大手町 2-6-4) |
| ■参加者数 | 63名 公共図書館職員、病院図書室司書、がん医療に携わる医療関係者(医師、看護師、MSW、 産業医)、自治体職員、大学教員、行政書士、企業、学生 |
| ■主催 | NPO 法人キャンサーリボンズ、図書館海援隊リボン部 |
| ■協力 | 株式会社パソナ |

■プログラム (敬称略)

11:00-11:10 1. ごあいさつ(始まりの話) 岡山 慶子(NPO 法人キャンサーリボンズ副理事長)

11:10-11:55 2. 事例発表「図書館の健康・医療情報発信の事例と課題」(45分)

- ・渡邊 基史(三島市立図書館 司書)
- ・小林 隆志(鳥取県立図書館 支援協力課 課長)
- ・塚田 薫代(静岡県立こども病院 医学図書室 司書)

11:55-12:30 3. 医療者発表「病院・医療者側の声を聴く」(35分)

- ・高山 智子(独立行政法人 国立がん研究センターがん対策情報センターがん情報提供研究部 部長)
- ・福田 護 (NPO 法人キャンサーリボンズ理事長、
聖マリアンナ医科大学プレスト&イメージングセンター 院長)
- ・小林 茂樹(NPO 法人キャンサーリボンズ委員、
三重大学医学部附属病院 検診センター 副センター長)
- ・安井 久晃(NPO 法人キャンサーリボンズ委員、
独立行政法人国立病院機構京都医療センター 腫瘍内科診療科長)

12:30-12:40 ご挨拶 13:20~13:30(10分)会場提供のパソナ様より

12:40-14:30 4. ワークショップ (110分)

- ・テーマ) 「地域の図書館と、病院・医療従事者が連携してできること」
図書館と病院が連携するための方法(課題や解決策)、連携の事例紹介

14:30~15:15 5. 会場全体討論「よりよい連携の実現にむけて」(45分)

- ・連携のための意見、現状の取組み、所感…自由発言

15:15~15:25 6. これからの話 神代 浩(文部科学省初等中等教育局国際教育課長)

1. ごあいさつ (始まりの話)

■「地域の図書館との連携から始まった、図書館でのがん情報発信連携プロジェクト」

岡山 慶子 (NPO 法人キャンサーリボンズ 副理事長、朝日エルグループ代表)

キャンサーリボンズでは、がん患者さんの「治療と生活」をつなぐ、具体的な情報とケア体験を提供する場所「リボンズハウス」を展開しています。川崎市新百合ヶ丘にあるしんゆりリボンズハウスと、その地域の図書館である川崎市立麻生図書館との連携から、現在の図書館連携プロジェクトは始まりました。



第 11 回図書館総合展の学術情報オープンサミットフォーラム「一般市民に向けたがん情報サービス」(主催: 日本医学図書館協会、日本薬学図書館協議会 2010 年開催)で、川崎市立麻生図書館の職員の方と出会い、図書館はキャンサーリボンズのがん患者さんを支援する活動を知り、キャンサーリボンズは多くの市民が医療・健康情報を求めに来る図書館を知りました。そのことをきっかけに、川崎市立麻生図書館で医療セミナーなどを共催し、医療情報を提供する活動が開始しました。

その後、川崎市立麻生図書館館長 池原さん(故人)・職員 舟田さんの協力で、図書館海援隊に参加する健康・医療情報提供に積極的な図書館メンバーをご紹介いただき、2011 年 7 月図書館海援隊「リボン部」を結成、図書館で健康・医療情報を提供する活動を開始し、継続しています。

「がんと暮らす情報コーナー」という、各地の図書館に NPO が作成したツールや企業に寄付していただいた小冊子を提供する活動は、今年でコーナー設置館が 11 館になりました。また、去年は、リボン部として「第 14 回図書館総合展」でフォーラム開催や展示を行い、本日の「全力討論！」の開催に至ります。リボンズハウスと地域の図書館とのつながりが、NPO と図書館の皆さんと連携して大きな活動になったことを嬉しく思っています。

2. 事例発表 「図書館の健康・医療情報発信の事例と課題」

■「市立図書館における医療・健康情報サービス」

渡邊基史 (三島市立図書館 司書)



公共図書館は、主に来館での利用となりますが、利用者にとってとても敷居が低く、予約不要で無料のため利用しやすい場所です。調査等の目的の場合も、調査内容を他人に知られることなく、個人情報保護の面でも安心です。患者さんとその家族にとっては、入院前と退院後の利用が中心となります。入院中は、主に患者図書館を利用することになると思います。医療・健康情報を調べに来たついでに、小説や雑誌等、病気のこと以外の書物を借りて読むことで気分転換でき、患者さんの心のケアにも役立っているようです。いろいろな本があることが、公共図書館の強みです。借りる本を選ぶついでに、身体の気になることや、友達が病気になったから調べていく逆のケースも可能です。

図書館司書は、利用者が求める資料の場所や資料全般の知識はありますが、各分野の資料内容については専門知識が乏しいです。専門知識が乏しい状況では、蔵書の選定を行うことが困難です。また、そのため、市民からのリクエスト購入に応じた結果、特定の健康食品などを勧めるバイブル本等が入ってし

まうこともあります。蔵書の内容が貧弱になると、レファレンスサービス*で提供する資料の質が落ち、対応能力が落ちます。

一般的に、図書館で健康・医療情報を調べることができることを知らない利用者が多く、事前にインターネット情報を調べていることが多いようです。図書館側の PR も必要だと思います。また、調べたい情報が、病気など話しにくい内容のため、窓口で相談することが少ないこともあると思います。資料の利用に気が付かない図書館員は、利用者のニーズをつかみづらく選書にうまく反映されないということもあります。

近年、健康・医療情報を提供する図書館が増えてきましたが、全ての図書館で提供できておらず、提供している場合でも、健康・医療情報サービスがあることを市民が知らない場合も多いようです。今後、サービス拡大のためには、図書館側からも様々な PR が必要だと考えています。

*レファレンスサービス…図書館利用者からの質問・相談を受けて、図書館職員が図書館資料の紹介や資料を探すためのお手伝いをするサービス

■「鳥取県立図書館における医療・健康情報提供の取り組み」

小林 隆志（鳥取県立図書館 支援協力課 課長）

図書館は、利用者が多く敷居が低いので、多様な利用者がいます。病気の方やそのご家族、病気の可能性があり心配している方、いろんな方が来館します。そして、このことが財産です。情報の発信場所としてとらえた時、いろいろな可能性があるので。また、図書、雑誌、論文、機関誌、新聞、データベース、パンフレットなど、多様な情報源があり、情報ナビゲーターとしての司書職員の存在、土日祝日に開館しているということも強みです。



進化した図書館は、課題解決型（ビジネス支援、生活トラブル解決支援、子育て支援、医療・健康情報の提供）の図書館です。市民の皆さん方の幸せに貢献したい、という意識を持った図書館が増えてきています。課題解決につなげていくためには、図書館単体では無理、専門家につないでいくことが大切です。図書で概論を調べることはできますが、個々のケースについては、専門家にいかにつないで情報を得ていくことが大切です、健康・医療情報についても同様です。

鳥取県立図書館の健康・医療情報の提供について。図書資料購入は、1,526 冊、昨年日版が扱った医学書総数 5,292 件のうちの 28.8%、3 冊に 1 冊は購入できています。また、図書以外の健康・医療情報も提供しています。がんセンターや各企業のパンフレットなどを提供しており、がんセンターとアフラックが協働している「がんと暮らす情報コーナー」も設置しています。

闘病記文庫は平成 18 年にコーナーをオープン、平成 23 年にリニューアル。患者会と意見交換をしながら図書館のサービスのあり方を伺い、ソファやプライバシーを守る間仕切りを設置をするなど、患者さんにできるだけ寄り添ったコーナーに作り替えました。

健康・医療情報の普及啓発として、館内でフォーラム・シンポジウムを開催しています。福祉保健部開催の「健康情報まるごと講座」を誘致し館内で開催、テーマに沿った図書を会場に並べ、すぐに手に取っていただけるようにしたり、リストを配布して満足度を上げています。季節のイベントに関連した

仕掛けや、様々な連携機関の情報を借りての展示もしています。

また、図書館での情報提供についての PR 活動を館外でも（営業）しています。

医師会が毎月開催している健康講座に県立図書館職員が参加させていただき図書館を PR したり、テーマに沿った図書を会場に並べ図書館の外からでも本を借りられるようにしています。がんフォーラムなどのイベントにも参加しています。

県立図書館が絡むとできること。県立図書館は、新しいサービスを開発していきます。市町村立図書館がやりにくいことをまずやってみて、失敗や成功の体験を積み重ね、町村立図書館に展開していくことが県立図書館の役割だと考えています。鳥取の自治体数は 19、半分以上の自治体が医療・健康情報を提供しています。日本中でこういう地域は他にはありません。県立図書館が取組む意味、地域の図書館を巻き込める可能性が広がります。点ではなく、面で展開したいと考えています。

県立図書館が、それぞれの地域の館種を超えた図書館の連携の要になることが大事です。

鳥取では、全ての県立病院（鳥取県立厚生病院、県立中央病院図書室）に司書のいる患者図書室があり、病院が自主的に図書室の職員を採用しています。県立図書館もサポートをしていますが、病院が主体になっていることが重要です。

やわらかい本、娯楽の本、絵本は地元図書館がサポートする、少し高度な医学情報は県立図書館がサポートする、最先端の情報、専門医学書は鳥取大学の医学部がサポートする、という連携が県立図書館が絡むとできます。

電話一本でこの連携が出来るのが、今の鳥取の強みです。日常的に館種を超えた図書館同士のつながりを作っておくことが大事なことで、そのつながりがあれば、医療・健康情報サービスでもこういった連携ができるのです。

課題としては、図書館職員の意識改革をどう進めるか、利用者の意識熟成にどう働きかけるか、病院職員の意識改革をどうすすめるかといった点です。

様々な条件が変わってもサービスが継続されるようにする上では、信念がある司書が育っていることが重要です。連携の継続性についても、司書職員が図書館職員であり続け、連携の要になっていくことで初めて連携の継続性が保たれます。

最大の課題は、図書館職員の意識だと思っています。

■「静岡県立こども病院図書室と公共図書館・学校図書館の連携」

塚田 薫代（静岡県立こども病院医学図書室）

静岡県立こども病院図書室の機能には、医学図書室（スタッフ用、医学書などの専門書）、患者医学図書サービス（ご家族用、分かりやすい医学書など。医師の話は 30%くらいしか残らない、さらに詳しく調べることもできインフォームドコンセントにもなる。）わくわく文庫（入院患児用の絵本や児童書、漫画など）、地域との連携（学校図書館、公共図書館との連携）があります。

医学図書室は、患者さんのご家族に開放しています。医師の説明は 30%くらいしか頭に残りません、辛いこと悪いことだけが頭に残ります。きちんと反芻することが大事。きちんと調べることでインフォームドコンセントにもなります。納得すればお母さん方も安心し、親が安心すると子供も落ち着きます。



親を支えるのは、とても大事なことです。また、気持ちを支える情報（闘病記・物語・絵本・随筆など）がとても大事です。

子供は、病院の図書室に社会とのつながりを求めてきます。病院の図書室は社会との窓、シャバの空気を吸いに来ます。そのあと、学校図書館、公共図書館とつながることに意味があります。本当は、退院した後が大変。そこを支える意味が大きいです。

入院の前後を支えることは、病院ではできません。特に退院後（After Hospital）。高い山からいきなり日常生活に飛び降りたら怪我をします。どうやってソフトランディングさせるかが課題です。子どもの病気はそのあとが長い。就職や結婚など、人生での大きなイベントが待っています。大きなハンデを持っている子供を支えるのは、病院や行政だけでは難しい、図書館の力が必要です。

公共図書館では、Before・Afterを支える。気持ちを支えることが強みで、メリット。そこに医学図書室との繋がりができてくるのです。病気で途方にくれているときに、一緒に考えましょう、この本で気持ちを楽にしてくださいと言われるのはうれしいです。多方面の情報を持っているのが公共図書館の強み。退院後の生活を支える情報（リハビリの方法、食事療法、教育、お金、美容、就労、人間関係、生きがい・メンタルヘルスなど）が必要です。

子どもを中心に三角形の輪を組んで医学情報を回していくことを提案しています。

学校で正しいがん情報（正しい知識、情報の集め方、がんに対する考え方、自分の健康を守る姿勢）を得られれば、がんはそんなにこわい病気でなくなるかもしれません。

図書館にお願いしたいもうひとつのことは、医療者を応援してほしいということです。繋がるのも大事ですが、病院スタッフは日夜本当に頑張っています。地域の人が応援してくれたら、お医者さんもすごく喜ぶと思います。ぜひ、エールを送っていただきたいと思います。

3. 医療者発表 「病院・医療者側の声を聴く」

■国立がん研究センターがん対策情報センターの活動について

高山智子（独立行政法人 国立がん研究センター

がん対策情報センターがん情報提供研究部 部長）

全国に、現在約 400 のがん診療連携拠点病院があり、携拠点病院には必ず相談支援センターが設置されています。患者さんが利用できる情報に地域格差や病院格差があり情報が得にくい、情報を得られる場所を拠点病院の中に作ってほしいという声を反映して、相談支援センターは作られました。がん対策情報センターでは、相談支援センターで提供する情報や冊子等を作成・提供、相談支援センターへの研修を行うなどの支援をしています。

国立がん研究センターがん対策情報センターでは、厚生労働省や都道府県、学会・研究機関、NPO などから情報を収集し、編集・評価して患者さんやご家族、一般市民に提供しています。当センターのがん情報制作物は、「がんの冊子」と書籍があります。冊子は、がん種別や小児用、心、口内炎など 53 種類あり、1冊 30 円でがん診療連携拠点病院に購入していただいております。ニーズも高い状況です。書籍は、「患者必携がんになったら手に取るガイド」「患者必携 もしもがんが再発したら」があり、院



内や全国の書店、インターネットで購入できます。

冊子を作成し始めた当初、拠点病院だけでは冊子を配布しきれないこともあり、多くの人に情報提供できる図書館に、日本図書館協会を通じて冊子を配布、その後、健康・医療情報提供の調査「全国の公共図書館の健康・医療情報に関する整備状況の実態把握調査」を実施しました。対象は 1980 館、うち 1307 館から回答(66%回収率)がありました。

その結果、2005 年以降の 5 年間で健康医療分野の資料の貸出やリクエストが増えてきた、という回答が約半数 49%ありました。実施された資料の提示・提供については、「展示」26%、録音・点訳・音訳など 26.3%、は多いものの、健康・医療情報に関する資料収集(14.2%)や講演会(6.3%)はまだ多くありませんでした。健康医療情報についての連携は、他の公立図書館との相互貸借(54%)は多いものの、他機関との連携についてはこの時点ではまだまだあまり実施されていませんでした。

また、健康・医療情報サービスをしてよかったこととして、「利用者に好評・感謝された、貸出が増えた」98 件、「レファレンスや案内がしやすくなった」12 件、「ニーズが把握できた・PR できた・他機関との連携が進んだなど、図書館の運営に役立った」16 件でした。

健康・医療情報サービスをして困ったこととして、「選書・レファレンスの難しさ／図書館の対応範囲を超える要求が寄せられる」など 104 件あり、「どの程度の専門書まで購入すべきか、闘病記をどこまで揃えるべきか、選書の基準が難しい」という声や、「レファレンスインタビューとして、利用者の病状などをどこまで聞いていいか迷うことがある。医療情報が載っている資料を提供することが図書館としてできることだと思うが、利用者はそれ以上の情報（どの病院に行ったらよいか、何をすれば良くなるか等）を求めているときもあり、対応に苦慮することがある」、「各種民間療法等の関連資料について、誤った情報提供の可能性があることから、公共図書館の医療情報提供について、難しさを実感している」など、対応や情報収集の悩みが目立ちました。

情報を得にくい市民に向けた情報提供、について

昨年より、がん情報サービスホームページで、点字図書館、公共図書館、がん診療連携拠点病院などで利用できる点字・音声図書を作成しダウンロードサービスを開始しました。また、視覚障害をはじめとする障害のある人に向けたがん情報点訳・音訳資料作成支援をしています。堺市立健康福祉プラザセンターが加盟する全国視覚障害者情報協議会の協力も得ながら、障害のある方にもがん情報を届けていくための取り組みを進めています。病院からリクエストがあれば堺市立健康福祉プラザセンターにつないで音訳していただいて提供することができます。

がん対策情報センター企画の今後のコンテンツについて、現在は、病院主体の情報を作って提供していますが、治療の情報は病院で提供しやすいですが、予防や再発など、周辺になればなるほど病院での配布が難しくなります。病院を探している人、死について考えている人も当然ながら多いと考えられますが、そういう方たちへの情報提供は、生活者視点の図書館などの方が提供しやすいように思います。医療機関の中では、積極的に治療している方がいる中では、「再発」の情報でさえ出しにくい声があります。病院では、出しやすい情報・出しにくい情報があるということです。

滋賀県では、がん対策推進計画の中で、相談支援センターは公共図書館との連携を図り、県民が容易に情報を入手できる場所の拡充を行う、としています。また、長崎市では、長崎市立図書館と長崎市立市民病院（地域がん診療連携拠点病院）の共同企画で「図書館でがんを学ぼう」市民のためのリレー講座を開催しています。各自治体で、図書館と医療機関の連携は始まっています。

■リボンズハウスと地域の図書館の連携のはじまり

福田 護 (NPO 法人キャンサーリボンズ理事長、聖マリアンナ医科大学プレスト&イメージングセンター 院長)

非常に多くの方が、がんになります。男性の 2 人に 1 人、女性の 3 人に 1 人ががんになり、そのうちの 3 人に 1 人ががんで亡くなります。また、がんは多様です。沢山のがんがあります。がんは治る病気になり、がんの後の生活が長くなってきました。

病院だけでがんを抱えている時代ではなくなってきました。

地域でがんを考え、社会全体で支えるということから、キャンサーリボンズを発足しました。



医師は、とかく患者さん中心とした医療を考えますが、地域全体、人間と人間の関係性を中心にがんのケアを考えるのがキャンサーリボンズです。

こういう活動をするためには、インフォメーションが最も大切。最も効果的な方法のひとつが、地域の情報の中心である図書館であると思います。

そういう考えから、地域の図書館としんゆりリボンズハウスとの連携を始めました。活動内容としては、川崎市立麻生図書館での医療セミナーや、患者さんやご家族が選ぶ「心に残る闘病記」の感想文募集をしんゆりリボンズハウスと麻生図書館共催で行いました。病院の中でなく、図書館で開催できたことの意味が大きかったと思います。

地域の図書館との連携が広がり、NPO といろいろな図書館との連携につながり嬉しく思っています。

■三重県立図書館と三重大学病院リボンズハウスの連携事例

小林 茂樹 (NPO 法人キャンサーリボンズ委員、三重大学医学部附属病院健診センター 副センター長)

三重県立図書館との連携は、リボンズハウスを院内に設置したことが大きなきっかけとなって始まりました。三重県立図書館が医療サービス研修を受講した際、キャンサーリボンズの存在を知り、県内にリボンズハウスがあることを知ったそうです。

当院と県立図書館は、車で 10 分程の至近距離です。

ちょうど、県立図書館でも新しいサービスの一環として、入院患者さんへの本の貸出しを検討中でした。リボンズハウスでも、本の貸出しを希望していたところでした。



現在の具体的な連携としては、三重県立図書館の健康・医療コーナーへのリボンズハウスのパンフレットやイベントカレンダー設置、県立図書館からリボンズハウスへの本の貸し出しなどを行っています。がんに関する本は病院（がんセンター）が用意し、それ以外の本をお借りしています。選書は、リボンズハウスの職員が行っていますが、他部署にも意見を聞いて選書に偏りがないようにしています。お借りする本は、半年ごとに 300 冊入れ替えています。院内には患者図書館もありますが、この蔵書は職員が持ち寄った書籍で構成されており、定期的な入れ替えは行っていません。

人気のある本は、気軽に読める本で内容も重さも軽いものようです。例えば、患者さんが旅の本を読んで退院後の目標にしたり、抗がん剤の副作用で味覚が低下してしまった患者さんが、母親としてご家族のために料理を作ってあげたいとの強い希望をお持ちで、退院後の食事の参考になさるなどして活用しているようです。

選書についてはリボンズハウス内でも悩むことが少なくありませんが、院内のさまざまな部署からの意見を反映するようにしています。

■腫瘍内科医として図書館と連携したいこと

安井 久晃（NPO 法人キャンサーリボンズ委員、独立行政法人 国立病院機構京都医療センター 腫瘍内科診療科長）

京都医療センターでは、まだ図書館と連携はしていませんが、今後連携して情報発信したいと考えています。

がん医療に関する不満として必ず出てくるのが、情報の少なさです。試しに、Google で「肺がん治療」を検索すると、200 万件がヒットしました。しかし、検索結果として実際に上位に挙がってきた内容は、信頼性の低い内容や個人病院の



広告など。医療者が一番信頼を寄せている情報のひとつ NCCN のガイドラインは 12 ページ目、国立がん研究センターHP は、20 ページ以内に入っていませんでした。[注：「肺がん」と「肺癌」では検索結果に違いが出ます。検索には“技術”が必要です]

このように、検索エンジンの結果は質が担保されたものではなく、広告やスポンサーサイトが上位にくるようになっていきます。特に、がんを告知されたばかりの患者さんやご家族にとって、信頼性の高い情報を調べるのは難しいことを知っておく必要があります。

京都医療センターリボンズハウスにも書籍を置いていますが、診療ガイドラインなどは最新のものをそろえています。闘病記なども、個人的にはこれまであまり目をとおしたことはありませんでしたが、がんになって間もない患者さんには、まず手に取る情報として有用かもしれません。また、生活の不安などに答える内容の情報を求めている方もいらっしゃると思います。

今後、図書館と連携をして医療情報を発信する際には、医療従事者として、正しい情報や偏ったものにならないように、またきちんとしたエビデンスにもとづく情報を発信したいと思っていますが、一般の方が理解したりアクセスするのは難しいので、うまくナビゲートする役割も必要だと思っています。

また、図書館側には、地域住民の健康の意識向上になるのだという意識で情報提供していただきたいと思っています。司書の中にもがん詳しい方など、役割分担をしながら専門知識に強い人に出てきてほしいと思っています。

4. ワークショップ・会場全体討論

図書館と病院が連携するための方法や課題などについて、7グループに分かれて討議しました。活発なディスカッションの後、グループごとに意見をまとめて発表しました。



グループワークの様子



グループ発表の様子

図書館と医療者の連携をスムーズにするための課題として、下記のような意見がいくつかのグループから上がりました。

- ・「図書館、病院それぞれの窓口をつくり、担当者を明確化する」
- ・「図書館の健康情報提供活動をもっと PR する」

また、「選書が専門的で難しい」という問題点いくつかのグループからあがりました。

解決策として、

- ・「患者図書館・大学図書館・医療図書室との連携」
- ・「医療者に関わって欲しい」
- ・「図書館でも人材育成する」
- ・「まずは、絵本、写真集、絵画集などできるところから始める」
- ・「患者さんが情報を一番もっているので、患者さんの声を聴く」

などの、意見がありました。

情報をどこで手に入れたらいいのかわからない方のために、「情報の橋渡し」も必要。

そのためにも、地域の図書館が PR を含め情報発信をどんどんしていく、そのことが、医療情報は敷居が高い、という意識を変えることにもつながる、という意見がありました。

また、今回のワークショップのような「他業種で集まる場所」を共有することも大事、全国規模で意識を高めたい、という声もあがりました。

■まとめ

図書館海援隊リボン部部长、文部科学省 神代浩さんよりワークショップをふりかえりながら、今後の連携ポイントをまとめさせていただきました。

図書館からの医療情報発信を考える時、医療現場との連携、病院図書室や患者図書室との連携、他館との情報共有など、いろいろな連携があることが分かりましたが、連携したい他の機関の担当者とのつながりをいかに日常化するかが何より重要です。

人は連携のキーになると同時に障壁にもなり得ます。新しいコンセプトを理解してもらうのは難しく、なかなか館内で企画が通らないということもあるでしょう。どの組織でも起こりうることで、そこで止まっては前に進みません。まずは、連携の意欲を有する、言わば「志のある」者同士がつながり、情報を共有し、知恵を交換し合うことが重要です。そのようなやり取りを続けるうちに、賛同者が増え、組織として取り組む可能性が広がっていきます。

組織を超えて何かあったらいつでも連絡しあえる関係づくりから、まずは始めましょう。